

中国語の副詞“可”の語気*

伊藤 さとみ

1. はじめに

中国語の“可”には様々な用法がある。呂叔湘1980は、“可”を“可₁”、“可₂”、“可₃”の三つに分け、“可₁”には許可、可能、価値があることを表す助動詞、強調の語気を表す副詞、疑問を表す副詞の三つの用法があり、“可₂”は逆接を表す接続詞として、“可是”と交換可能であり、“可₃”は形容詞を作る接尾辞（例えば、“可喜、可靠、可口”の中の“可”）であると区別している。本稿では、このうち、強調の語気を表す“可₁”の副詞の用法を取り上げる。以下、強調の語気を表す副詞“可₁”を“可”と記す。

“可”の表す強調の語気は、現れる文タイプや文脈によって異なっている。呂叔湘1980では、陳述文、反語文、命令文、感嘆文に現れる例を挙げ、陳述文では意外性を、命令文では切実性を表すと述べているが、それ以上の詳しい説明はない。実際のところ、“可”の表す語気は、何かを強調することにあるのだが、強調される対象は文脈により異なっており、一つに定義できるものではない。そこで、副詞“可”の表す語気をめぐっては、その表す語気を詳細に分類し記述する研究と、分類学・記述的アプローチに反対して統一的な説明を試みる研究、歴史的な経緯を明らかにする研究などがなされてきた。本稿では、これらの研究を俯瞰し、“可”の語気について提案されてきた項目を整理し、母語話者への聞き取りを通して、その妥当性を検証する。

2. 先行研究

2.1 初期の記述的分類

“可”についての初期の記述的な研究には、楊惠芬1993があり、陳述文、感嘆文、命令文、疑問文、複文という、異なる文タイプそれぞれにおける“可”の語気について述べている。それによると、“可”には以下の7つの分類がある。なお、音声的なストレス、即ち強勢を持つかどうかとも分類の基準の一つであるので、以下、強勢を持つ語の前に“”を付加して表す。

A. 平叙文で、叙述内容が事実であることを表す。強勢を持たない。

1) 这问题可不简单, 得好好研究一下。(吕叔湘《八百词》)

(この問題は全然簡単ではなく、一度よく考える必要がある。)

B. 感嘆文で、強調や意外性を表す。強勢を持たない。

2) 这个主意可好! (老舍《红大院》)

(このアイデアはとても良いね!)

C. 感嘆文で、誇張のニュアンスを表す、または、待ち望んでいたことが実現したことを表す。強勢を持つ。

3) 游击队里有个叫小刘的队长, 别看二十几岁的人, '可懂事呢。(鲁南《拜年》)

(ゲリラ隊は劉という名の隊長がいて、二十歳ちょっとだが、物がよくわかっているんだ。)

4) 哎哟, 厂长, 你可回来了! (蒋子龙《乔厂长上任记》)

(ああ、工場長、やっと帰ってきましたね!)

D. 命令文では、切実な言い聞かせや希望を表す。強勢は持たない。

5) 不过你呀, 到食堂后, 说话可软和点, 别把人都得罪完了。(李准《李双双小传》)

(でもね、あなた、食堂に行ったら、話し方をもう少し穏やかにしてくださいよ。他の人たちみんなの機嫌を損ねてしまわないように。)

E. 諾否疑問文を作る。強勢は持たない。

6) 大家可记得龙梅伯伯打鬼子的故事？(赵沛《黑龙湖的秘密》)
(みんな劉梅おじさんが幽霊をやっつけた話を覚えているかい。)

F. 疑問文で、疑問や反語の語気を強める。強勢は持たない。

7) 我问你，那些钱可都上哪儿去了？(老舍《龙须沟》)
(聞くけど、あの金はいったいどこに行ったのかね。)

G. 複文の後行節、または、対比される対象のある文脈に現れ、先行節の内容から予想されることや話し手の主観的な願望と、客観的な事実が異なっていることを表す。強勢は持たない。

8) 我骂疯子，可以；别人欺负他，可不行。(老舍《龙须沟》)
(この狂人を私が叱るのはいいが、他の人がいじめるのはダメだ。)

この楊惠芬1993の記述は、“可”の研究、特に“可”の分類の研究に大きな影響を与え、この分類の細分化や分類の統合が提案されてきた。なお、“可”の品詞については、楊惠芬1993はすべて語気副詞とみなしているが、この点については後の研究で異論がある。

2.2 他の副詞との比較

初期の研究では、“可”の働きをより明確にするために、“可”と他の副詞との比較がよく行われている。原1985は、“并”、“倒”、“却”といった逆接を表す副詞との比較を通して、“可”は確認的、専一的、絶対的であると述べた。具体的には、“可”は叙述の内容の肯定をしており(確認的)、他の命題や一般的道理とは無関係に述べており(専一的)、時間幅を表す語と共起しないが、時間を表す語と共起することから、他を顧みない叙述である(絶対的)という特徴を挙げている。

劉丹青、唐正大2001は、語気副詞“并”との比較を行い、“并”を伴う文(9)は独立して用いることができるのに対し、“可”を伴う文(10)は、解釈するために適切な文脈が必要であることを指摘した。適切な文脈とは、当該文と対

比の関係にある主述構造が存在する、または、推測される文脈である。例えば、(10)では、“李四愚蠢”という主述構造が先にあり、“可”を伴う文の主語“张三”と述語“不愚蠢”は、先行する主述構造の主語、述語とそれぞれ対比の関係にある。

9) 张三并不愚蠢。

(張三は決して愚かではない)

10) 李四愚蠢，张三可不愚蠢。

(李四は愚かだが、張三は愚かではない。)

刘丹青、唐正大2001は、この違いに基づき、“可”は主語が対比話題であることをマークする演算子、即ち、対比話題演算子であると主張した。(原文では“話題焦点敏感算子”であるが、本稿では、話題焦点という概念を支持せず、一般的な言語学の用語に近い対比話題として記す。)この“可”は上述の杨惠芬1993の分類Gの一部に当たる。また、以下の(11)のような強勢を持つ“可”は対比話題演算子ではなく、主語が話題であることを要求する“話題敏感算子”、即ち話題演算子であると述べた。

11) 那条大路可宽广啦。

(あの大通りはすごく広いなあ。)

話題演算子である“可”は、強勢を持つという特性から見て、杨惠芬1993の分類Cのうちの、誇張を表す用法に当たると思われる。

三
⑥
陈朝珠2001は、“可”を“真”と比較し、共通点が多いことを指摘している。そして、“真”が評価副詞(“评注性副词”)に分類されることから、“可”も評価副詞に分類すべきだと述べている。評価副詞とは、张谊生2000で提案された副詞の分類で、出来事や命題に対する話し手の主観的評価や態度を表す副詞である。陈朝珠2001は、“可”と“真”が連用される順序についても触れ、张谊生

2000が副詞の連用について提案した規則、a. 主観を表す傾向が高い副詞は前に置く、b. 意味の作用域が広い副詞を前に置く、という規則に従っていると述べている。つまり、“可”は述部全体への評価を行い、高次述語、即ち文全体を作用域に取る述語であるので、主観を表す傾向を持ち、作用域が広いが、“真”は高次述語としてだけでなく連用修飾語として使われることも多く、作用域が狭いため、“可真……”という順序になると述べている。

これらの研究は、“可”を強調を表す副詞群の一つとみなし、他の強調を表す副詞との差異を明らかにしようとする研究であると言える。

2.3 “可”の分類の発展

杨惠芬1993の分類は、文タイプによる分類であり、“可”の用法の共通性や全体像が分かりにくい。そこで、より単純な分類として、強勢を持つか否かによって“可”を分ける試みが提案された。例えば、罗晓英、邵敬敏2006と蒋协众、魏会平2008は、強勢の有無により“可”を異なる品詞に分類する必要があると主張している。罗晓英、邵敬敏2006によると、強勢を持つ“可”は誇張の語気を帯びた程度副詞であり、(12)に示したように、その修飾する形容詞や心理動詞句の表す属性の程度が高いことを表す。これは上述の杨惠芬1993の分類Cの誇張を表す用法に当たる。一方、強勢を持たない“可”は、逆接を表す語気副詞であり、(13)のように意外性を表す。強勢を持たない“可”が表す逆接の語気は、「肯定文<否定文<文脈に対して逆接を表す文<先行する節が“虽然”で始まる文」の順に強くなり、陳述文／疑問文／命令文／複文などの文タイプを考慮する必要はないと述べている。従って、強勢を持たない“可”は、杨惠芬1993の分類のA～B、D～Gをすべて含むことになる。

<強勢を持つ“可”>

12) 昨天，一个姓林的女老师给我讲了好多你的事，她'可喜欢你啦。(张承志《黑骏马》)

(昨日、林という名前の女教師が私にあなたのことをたくさん話してくれま

したよ。彼女はあなたのことがとても好きなんだね。）

<強勢を持たない“可”>

13) 这一问可把我给问住了。(吕叔湘《八百词》)

(この質問には、私は困りました。)

他に、強勢と併せて、意味指向に基づいて、“可”を分類する分析もある。李善婧2009は、逆接を表す“可₁”、強調を表す“可₂”、疑問文や反語文の語気を強める“可₃”の三つに大きく分類したが、意味指向の点では、“可₁”は多指向、即ち二つの対象を修飾するものであり、“可₂”と“可₃”は単指向、即ち、一つの対象のみを修飾するものであると述べている。“可₁”が指向する対象が二つ以上であるとは、当該文の述語と、それと対比される述語の両方を指向するということであり、対比される対象は潜在的であったり先行文脈に現れていたりする。“可₂”と“可₃”が単指向であるとは、当該文の述語または疑問詞を一つだけ指向していることを指す。なお、多指向と単指向の区別には、強勢の有無が重要な判断基準となる。次の(14)と(15)では、“可”は同じ文の中にあるが、文脈が違えば、強勢の有無において異なる。そして、(14)の強勢のない“可”は多指向の“可₁”であり、(15)の強勢のある“可”は形容詞を指向する“可₂”である。

14) 是今晚的风大还是昨晚的风大?— 昨晚。你不知道, 昨儿夜里的风可₁大了。

(今夜風が強いのですか、それとも昨夜強かったのですか。— 昨晚だよ。知らないの? 昨日の夜は風が本当に強かったよ。)

15) 昨儿夜里风大不大?— 昨儿夜里的风可₂大了。

(昨夜は風が強かったですか。— 昨夜は風がとても強かったよ。)

このように、近年の研究では、強勢のある“可”を心理動詞や形容詞を修飾して程度の高いことを強調する副詞とし、強勢のない“可”をその他の意味を表す語気副詞と区別するのが一般的となった。

2.4 “可”の語気の種類

大まかな分類としては、強勢のある“可”と強勢のない“可”に分けられるが、さらに細かな分類がやはり必要であるとする研究者も多い。強勢のある“可”については、程度副詞として比較的均一な働きをするが、強勢のない“可”、即ち語気副詞の“可”の用法は、多岐に渡るからである。以下、“可”の語気について細かな分類を行い、その判断基準などを述べた研究を紹介する。

盛继艳2005は、“可”の機能として、①陳述文において叙述内容の真偽判断を表し、②疑問文において詰問の語気を表し、③命令文において婉曲的依頼を表し、④感嘆文において誇張を表す、という四つの機能を主張している。つまり、“可”の機能は、それぞれの文タイプに備わる異なるモジュールを強めたり弱めたりすることにあると述べている。これは、杨惠芬1993の分類を簡素化したものと言える。

李冬梅2014は、7種類の“可”、即ち、①程度の高いことを表す程度副詞、②「ついに」という意味を表す語気副詞、③諾否疑問文を表す疑問副詞、④逆接を表す接続詞、⑤対比を表す語気副詞、⑥反駁の語気を表す語気副詞、⑦叙述内容の重要性を示すマーカ―を提案している。この分類は、以下のような基準で行われている。

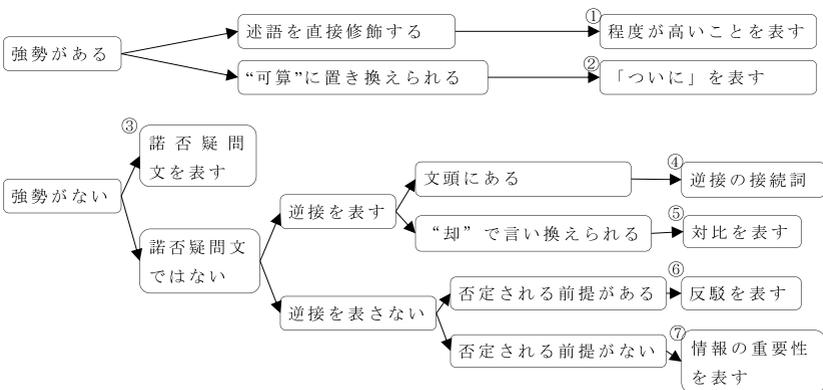


図1：李冬梅2014の分類

図1から分かるように、“可”は、強勢の有無で二つのグループに分けられた後、強勢がある“可”は述語を直接修飾すれば、程度が高いことを表す程度副詞(①)であり、“可算”で置き換えられるのであれば、「ついに」という意味を表す語気副詞(②)に分類される。強勢がない“可”は諾否疑問文(③)とそうでないグループに分けられる。諾否疑問文ではないグループは、さらに逆接を表すか、表さないかにより、二つのグループに分けられ、逆接を表す“可”は、文頭にあれば、逆接を表す接続詞(④)であり、“却”で言い換えられれば、対比を表す語気副詞(⑤)である。また、④と⑤の区別としては、④では、文中の強勢が自然焦点と同じ、即ち文末にあり、⑤では、文中の強勢が対比焦点と同じ、即ち文末以外の要素にあると述べている。逆接を表さない“可”は、否定される前提があれば、反駁を表す語気副詞(⑥)であり、否定される前提がなければ、情報の重要性を強調する語気副詞(⑦)である。この分類の特徴は、“可”の現れる文タイプによる分類、即ち、陳述文か、感嘆文か、疑問文か、命令文か、複文かという区別をなくし、各語気を判断する明確な基準を示したことにある。④の逆接の接続詞は、楊惠芬1993の分類にないため、それ以外について楊惠芬1993の記述との対応関係を見ると、分類Cは①「程度の高さ」を表す程度副詞と②「ついに」という意味を表す程度副詞の二つに対応し、分類Eは③疑問文としてそのまま引き継がれ、分類Gは⑤対比の語気副詞に、分類A、B、D、Fは⑥反駁を表す語気副詞と⑦情報の重要性を強調する語気副詞にゆるく対応する。語気の観点から見ると、⑦の情報の重要性を示す働きが、叙述内容が事実であることを示す機能、意外性を表す機能、切実な言い聞かせ、疑問や反語の語気の強め等、多くの用法をカバーすることになる。

王素改2016は、構造上、述語を修飾するものを副詞の“可”、文頭に現れるものを接続詞の“可”と区別し、副詞“可”の特徴として、コピュラ動詞“是”や程度副詞“真”、“太”とよく共起すること、連体修飾語の中には現れないことを指摘している。さらに、“可”の中心的な意味は、主観的な強調を表すことにあり、異なる文脈においてそれぞれ異なる意味を派生すると述べた。派生する意味は、以下の6つである。①肯定または否定の意味を強める、②弁解、反駁

を表す、③聞き手の注意を促す、④期待する、または阻止する、⑤長い間待ち望んでいたことが実現したことを表す、⑥反語及び疑問の語気を強める。このうち、⑤の意味を表すときのみ、強勢を持ち、他の時は強勢を持たないと述べている。分類の判断基準については、特に示していない。①については、杨惠芬1993の分類Aにある叙述内容が事実であることを述べる機能に対応し、②については、分類Gの客観的な事実が文脈や話者の主観と異なることを示す機能に対応する。③については、多くの語気副詞や助詞がこの機能を持ち、“可”に特化して設定する意義がない。④は分類Dの命令文での切実な言い聞かせや希望に対応し、⑤は部分的に分類Cに、⑥は分類E、Fに対応する。

杨安珍2017は、接続詞の“可”や疑問文を作る“可”などを排除した上で、四つの分類を提案している。即ち、語気副詞の“可”、程度副詞の“可”、順接接続副詞の“可”、逆接接続副詞の“可”である。語気助詞の“可”(16)と程度副詞の“可”(17)はともに主観的な肯定を表すが、前者は強勢を持たず、後者は強勢を持つという点と、(17b)に示したように、程度副詞の“可”は他の程度副詞と共起できない点で語気助詞と区別される。接続副詞の“可”については順接と逆接の二つの下位分類がある。先行節の表す条件が満たされれば、後行節の内容が実現することを表す場合は、順接接続詞であり、先行節の内容と後行節の内容が相反する場合は逆接接続詞である。順接接続詞の場合の先行節は、“要是”や“如果”などの接続詞を伴っており(18)、逆接接続詞の場合の先行節は、並列構造にある(19)か、または、“虽然”や“就算”などの接続詞が導く譲歩節(20)である。

<語気助詞の“可”>

16) 今天可很容易得到按揭贷款, 让他马上就能买到自己的房子。

(今日は本当に簡単にローンが組めたので、彼は自分の部屋を買うことができた。)

<程度副詞の“可”>

17) a. 这条鱼'可新鲜。 b. *这条鱼可很新鲜。

(a. この魚はとても新鮮だ。 b. ?この魚はとてもとても新鮮だ。)

<順接接続副詞の“可”>

18) 他要是来不了, 我可要找大姐算账了!

(彼がもし来られなかったら、お姉ちゃんに文句を言われるよ!)

<逆接接続副詞の“可”>

19) 看着简单, 做起来可没那么简单。

(見ると簡単だが、やってみるとそんなに簡単ではない。)

20) 就算再苦, 可也不能苦了孩子啊!

(たとえどんなに苦しくても、決して子供を苦しめるわけにはいかない。)

語気副詞の“可”と程度副詞の“可”の区別については目新しいことはないが、接続副詞の二つの用法については注目に値する。これは、楊惠芬1993が複文について提案した分類Gが少なくとも二種類の“可”を含んでいることを示唆している。

熊慧慧2020は、“可”の本来の意味は強調であるとした上で、強勢のある時は2種、強勢のないときは7種の、全部で9種類の“可”があると述べている。強勢のない“可”が強調するのは、①疑問の語気、②命令の語気、③確認の語気、④判断、⑤対比、⑥假定、⑦変化であり、強勢のある“可”が強調するのは、⑧喜びや感謝、⑨程度である。先行研究の中で最多の分類だが、①は楊惠芬1993の分類F、②は分類D、③と⑦は文末に“了”を伴うかどうかで分類Bを再分類したもの、④は分類A、⑤と⑥は分類Gをさらに細分化したもの、⑧と⑨は分類Cを細分化したものである。楊惠芬1993の分類Eにあたる“可”は取り上げられていないが、このような疑問文を作る“可”が近代中国語の用法であり、現代中国語の標準的用法ではないと認識しているようである。なお、確認の語気を表す③は“太”“真”“实在”“确实”といった程度副詞を直後に伴うことが多いという指摘をしている。この指摘は、陳朝珠2001の指摘、即ち、評価を表す“可”はこれらの程度副詞と共に起ることが多いという指摘と軌を一に

する。一方で、楊安珍2017が指摘したように、程度副詞の“可₂”はこれらの副詞と共に起らないことから、強勢の有無に加えて、他の程度副詞と共に起るかどうか、程度副詞の“可”と語気副詞の“可”を区別する判断基準となると思われる。

以上、“可”の分類についての研究を見てきたが、楊惠芬1993の分類の影響が強い一方で、その分類を煩雑すぎるとして簡素化する試みと、さらに細分化する試みの両方がある。分類Cについては李冬梅2014や熊慧慧2020で細分化が、分類Gについては熊慧慧2020で細分化が指摘されている。以下では、統一的な説明をしようとする試みを紹介し、これらの提案された分類のどれが重要な概念であり、どれが周辺的であるかを見たとうえで、本研究で考察する“可”の表す概念についてまとめる。

2.5 統一的な“可”の分析

以上のような、強勢の有無と出現文脈の違いにより、“可”が異なる働きをするという観察に対して、統一的な“可”の分析を提案する研究もある。張旺熹、李慧敏2009は、“可”は会話の中で話し手の予想を際立たせ、会話の双方向性を活発化すると主張した。張旺熹、李慧敏2009は“可”が許可を表す動詞から現在の用法に文法化したことから、「話し手」、「聞き手」、「予想または条件」、「達成」という四つの要素が形成する意味フレームにおいて、どの文脈に現れても、「予想」という素性が顕著であり、これによって会話の双方向性を刺激すると述べた。だが、会話に対する機能に関しては、この主張とは異なる観察もある。高松2009は、対比話題をマークする語気助詞“呢”との比較を通して対比話題演算子の“可”を考察した。その中で、“可”は聞き手に会話への参与を求める働きがないが、“呢”にはあると述べている。この研究に基づくなら、会話の双方向性を刺激する度合いが“可”<“呢”ということになり、“可”の会話の双方向性を刺激する度合いはそれほど高くないと思われる。

王英宪2015は、平叙文における“可”の例をテレビドラマ《渴望》全20回から例を集め、平叙文における“可”の働きは、叙述内容が事実であると強調す

ることと、対比をマークすることにある、と主張している。ただし、対比をマークする用法のうち、劉丹青、唐正大2001の主張した対比話題演算子に相当する例は“可”の全出現数のうち7%に過ぎないことを指摘している。大部分の例は、叙述内容と聞き手の主観的な認識の対比であり、話し手の述べる内容が事実である／事実になるだろうと思われることを、聞き手に強調する機能を持つと主張している。

王素改2015も、“可”は独立した文に現れ、対比の意味を持たないこともあること、また、話題を省略することもできることを指摘し、“可”は対比話題演算子ではないと述べ、むしろ後続要素が焦点であることを示す演算子であると主張している。だが、王素改2015が劉丹青、唐正大2001への反例として挙げた例は、楊惠芬1993の分類A～Fからの例であり、分類Gの例のみ取り上げて対比演算子であると主張した劉丹青、唐正大2001に対しては、厳密な意味では反例と言えない。また、“可”が焦点を示すことを支持する証拠には、以下のような例を挙げているが、これらの例は、“可”の後続要素のどれかが焦点となることを示しているだけであり、焦点は強勢が示していることから、必ずしも“可”が焦点をマークしているとは言えない。従って、“可”と焦点の関係は説得力がないと言える。

- 21) a. 我们明天在录音棚用新设备给那片片子录主题歌。
b. 我们可要在明天在录音棚用新设备给那片片子录主题歌。(不是其他时间。)
c. 我们明天可要在录音棚用新设备给那片片子录主题歌。(不是其他地方。)
d. 我们明天在录音棚可要用新设备给那片片子录主题歌。(不是其他设备。)
e. 我们明天在录音棚用新设备可要给那片片子录主题歌。(不是其他片子。)

張秀松2016は、“可”は“符合、相符”(合致する、一致する)という意味の動詞が文文化したものであり、客観的出来事と主観的予想との一致／不一致を示すのが本来の意味であると述べ、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文で観察される“可”の持つ異なる語気は、客観的出来事と主観的予想の一致／不一致か

ら派生すると主張している。具体的には、平叙文では、既知の客観的出来事と主観的予想の不一致から「予想外である」という驚きを、一致した場合は、「長い間待ち望んでいたことが実現した」喜びを、疑問文では未知の客観的出来事と主観的願望との一致／不一致から、疑問の語気を強め、「切実に聞きたい」という語気を示し、命令文では、近未来の客観的出来事と主観的な願望や憂慮との不一致から「言い聞かせる語気や阻止する語気」を示し、感嘆文では、客観的状态と主観的認識の不一致から、「予想外である」という語気を生む、と説明している。「未知の客観的出来事」や「近未来の客観的出来事」という定義は、「未知の」ないし「近未来の」という概念と「客観」という概念が矛盾しているという問題はあるものの、張秀松2016の分析は、文脈から予想される状態や聞き手の考えに対する話者の主観の対立を軸に考えており、「対比」を中心的な機能と考えていると言える。

以上みたように、統一的な説明を目指した研究は、会話の双方向性の活発化(張旺熹、李慧敏2009)、対比(王英宪2015、張秀松2016)、叙述内容が事実であることの強調(王英宪2015)、焦点のマーク(王素改2015)など、さまざまな提案がある。このうち、会話の双方向性の活発化と焦点のマークに関しては、他にもこれらの概念をマークする形態素や手段はあり、副詞の“可”単独の機能だとは考えにくい。従って、“可”の様々な用法に横断的にみられる特徴には、「叙述内容が事実であること」と「対比」の2点があると考えられる。前者に関しては、楊惠芬1993の分類A、B、D、Fに跨り、平叙文、感嘆文、疑問文のどれであるかに関わらず、この機能を持つ“可”は観察されると結論付けることができる。一方、後者の「対比」に関しては、楊惠芬1993の分類B、C、Gに跨るが、王英宪2015と張秀松2016が指摘したように、対比の対象により、先行文脈との対比、聞き手の主観との対比、話し手の主観との対比など、下位分類が考えられることが分かる。

2.6 通時的な考察

“可”の起源についての研究には、江藍生1990、江藍生2001、張雪平2005、

盛继艳2006、齐春红2006、齐春红2008、陈佳佳2015、苏俊波、余乐2018などがあり、大きく分けると、疑問副詞に由来するもの、程度副詞に由来するもの、助動詞に由来するものの三つの説がある。

“可”の疑問用法については、江蓝生1990が、後漢に反語を表す疑問副詞の用法が見られ、唐代には推量に基づく疑問を表す用法が生じたと述べている。また、この用法は、“岂、宁”などの同じく反語を表す副詞と役割分担する方向に圧力がかかった結果、反語ではなく推量を表すようになって生まれた可能性を指摘している。これを受けて、盛继艳2006は、唐宋時代に反語の語気から疑問と強調の語気を派生し、現代語の様々な語気を持つに至ったと述べている。

“可”の程度副詞用法については、江蓝生2001が、先秦において程度を表す用法があったと述べている。これを受けて、张雪平2005は、程度が高いことを表す“可”の用法は、戦国末期に生まれ、漢魏六朝にかけて発展し、唐宋期に成熟し、現在の程度副詞“可”の用法になったと述べている。

齐春红2006、2008、陈佳佳2015、苏俊波、余乐2018は、“可”の本義は“准许、许可（許可する、承認する）”という意味を表す動詞であると考えている。齐春红2008によると、先秦において、“可”は許可の意味から、可能の意味を派生し、反語文や命令文に頻繁に使われるうちに義務の意味も派生し、唐代には、強調を表す用法に発展した。一方、逆接を表す“可”は、明代に使われるようになり、その後、現代中国語の逆接の接続詞や対比話題演算子になったと述べ、実際に明清時代の小説と現代語の小説を比較して、前者より後者の方に逆接を表す“可”が多く見られることを立証している。これを裏付けるように、孙薇2002は、北方の作家と南方の作家の作品を調べ、北方の作家の作品の方が、対比を強調する“可”の用法が多くなることを指摘している。

以上のように、“可”の起源については、①疑問を表す用法、②程度が高いことを表す用法、③許可を表す動詞から疑問・反語の強調、さらには逆接や対比を表す用法へつながる流れ、の三つが提案されている。

2.7 先行研究のまとめ

以上、“可”に関する研究について、初期の研究から、様々な分類、統一的説明の試み、歴史的経緯までまとめた。内容としては、“可”の意味を他の副詞との比較から探求した研究、“可”の分類を行った研究、分類の整理または細分化を試みた研究、統一的意味を提案した研究がある。それらの研究を踏まえた“可”の語気の整理については、3節で述べる。また、歴史的には、“可”は疑問用法、程度用法、逆接・対比用法という三つの起源をもつことが分かった。

3. 調査

3.1 本稿で検証する“可”の語気

本稿では、杨惠芬1993の分類にその後の研究の成果を反映させて用いる。分類Aは、叙述内容が事実であることを表す、であったが、ここに、命題の真偽判断、情報の重要性を示す、確認、強調、変化などを表す機能が包摂されると考え、“强调所述内容之真实性（叙述内容が事実であることを強調する）”という項目Aとした。分類Bは、感嘆文において強調や意外性を表す、であったが、本稿では、王英宪2015や张秀松2016が提案した主観的な認識や予想と客観的事実の対比の意味を含め、感嘆文であるかどうかに関わらず、“表示出乎意料的语气（意外性を表す）”という項目Bを設定した。分類Cは、誇張を表す、または待ち望んでいたことがついに実現することを表す、であったが、李冬梅2014や熊慧慧2020の提案を取り入れ、C1“表示程度高（程度が高いことを表す）”とC2“表示愿望终于实现（望みがやっとかなう）”に分けた。分類Dは、杨惠芬1993の分類をそのまま受け継ぎ、切実な言い含め、希望、お願い、言いつけを表すものをまとめて“表示恳切的叮咛和希望（切実な言い含めと希望を表す）”として項目Dを立てた。分類Eについては、“表示疑问（疑問を表す）”としてそのまま項目Eを残した。このような疑問文を作る“可”については、古い用法の名残であり、現在では古い言い方または方言的な言い方とされるという見方もある（朱德熙1985、黄正德1988、吴振国1990、徐杰、张媛媛2011）が、

疑問や反語の語気を強める“可”、つまり楊惠芬1993の分類Fとの区別が難しい場合もあり、疑問に関連するものは、この項目Eに包摂する。従って、項目Eは楊惠芬1993の分類EとFの両方を含む。分類Gの対比を表す用法については、劉丹青、唐正大2001、楊安珍2017、熊慧慧2020らの提案を取り入れ、対比の対象に応じて区別した。聞き手の主観的願望・見方との対比を表す用法を、“表示反駁（反駁を表す）”として項目G1を立て、対比話題演算子の用法は、“表示该句与前一句相悖（当該文が先行文と意味上対立する）”として、項目G2とした。話し手の主観的願望・見方との対比を表す場合は、Bの意外性を表す用法に包摂されると考え、別に項目を立てることはしない。

<“可”の語気分類>

- A. 强调所述内容之真实性（叙述内容为事实であることを強調する）
- B. 表示出乎意料的语气（意外性を表す）
- C1. 表示程度高（程度が高いことを表す）
- C2. 表示愿望终于实现（望みがやっとかなうことを表す）
- D. 表示恳切的叮咛和希望（切実な言い含めや希望を表す）
- E. 表示疑问（疑問を表す）
- G1. 表示反駁（反駁を表す）
- G2. 表示该句与前一句相悖（その文が先行文と対立することを表す）

本稿では、この8つを“可”の語気とみなし、母語話者が区別できるかどうかを調査する。

3.2 調査例文の作成と調査手順

調査例文を作成するにあたって、3.1で決定した8つの“可”の語気それぞれについて、CCL（北京大学語料庫）から例文を選定した。選定の際には、前後の文脈を含めて取り出した。出現頻度の違いもあり、8つの語気について必ずしも均等に例文をつけることはできなかったが、できるだけ一例以上あるよ

中国語の副詞“可”の語気

うに工夫している。また、非母国語話者である著者の選定では、語気の判断が必ずしも正しくはないことを考慮し、母国語話者の判断も参考にした¹⁾。結果として“可”を伴う文を21例、全部で29個の“可”を抽出した。

抽出した29個の語気副詞の“可”について、中国語母語話者3名にA～G2のどの機能を表すのかを回答してもらった。回答は、主要な意味に加え、任意で副次的意味を答えることを可とした。調査用紙はメール添付で送り、回答が終わってから送り返してもらっている。以下、調査の提示例を示す。

请从下面八个选项中选择划线词“可”的含义，并填入相应词下面的括号里。如多选，请区分主要意义和次要意义。如果下列八个选项中没有恰当选项，请用文字写出您认为“可”表达的意思。

1. 爱因斯坦出席一次为他举办的正式宴会，来宾男的打白领带，妇女都穿裸肩的礼服，他的太太因感冒未曾同去，见爱因斯坦回家，急忙询问宴会的情形。他于是告诉她，今晚有几位著名的科学家出席。他的太太打断他的话，问：

“不要管那些，你告诉我太太们穿什么衣服？”

“我可真的不知道，”爱因斯坦认真地回答，“从桌子以上的部分看，她们没

(主要意义： 次要意义：)

①强调所述内容之真实性 ②表示出乎意料的语气 ③表示程度高 ④表示愿望终于实现
⑤表示恳切的叮咛和希望 ⑥表示反驳 ⑦表示该句与前一句相悖 ⑧表示疑问

有穿什么东西；而在桌子以下的那部分，我可不敢偷看。”

(主要意义： 次要意义：)

①强调所述内容之真实性 ②表示出乎意料的语气 ③表示程度高 ④表示愿望终于实现
⑤表示恳切的叮咛和希望 ⑥表示反驳 ⑦表示该句与前一句相悖 ⑧表示疑问

3. 3 調査結果

回答は、2人がすべての“可”について主要な意味と副次的な意味の両方を記入し、1人が主要な意味のみを記入した。その結果、3人とも主要な意味が

一致した“可”は12個、2人の主要な意味が一致した“可”は14個、3人とも異なる主要な意味を選んだ“可”は3個であった。また、主要な意味と副次的意味の区別なく数えると、3人とも同じ意味を選んだ“可”は26個、2人のみ同じ意味を選んだ“可”は2個、全員が異なる意味を選んだ“可”は1個となり、母語話者間でかなり高い一致度が観察された。

	3人が一致	2人が一致	全員異なる	合計
主要な意味のみ	12	14	3	29
主要/副次の区別なし	26	2	1	29

表1. 語気助詞“可”の意味の選択調査結果

そこで、本稿では、主要な意味について3人が一致した12例と、2人が一致した14例を分析の対象とし、全員が主要な意味について異なる意味を選んだ3例は除外することにした。

分析対象の26個について、2人以上が一致したものを、当該の“可”の語気とすると、次のような分布になった。

	A	B	C1	C2	D	E	G1	G2	合計
“可”例数	7	1	8	2	3	1	3	1	26

表2. 各語気における“可”の個数

あらかじめ各項目が含まれるよう例を選定してあるため、どの項目にも一つ以上の“可”の例が得られている。

4. 考察

すべての例の考察については、紙幅の関係上、ここでは行わない²⁾。本稿では、この調査結果のうち、先行研究の指摘と齟齬のある項目C1「程度が高いことを表す」用法について論じる。

2.3で述べたように、“可”の程度副詞の用法と語気副詞の用法は、強勢の有無で区別され、強勢を持つ“可”は程度副詞と考えられている。一方、“真”

との連用も判別の基準となることが指摘されている。“可”が“真”と連用される現象は、陈朝珠2001、王素改2016などで指摘されているが、杨安珍2017は、“真”と連用されるのは語気副詞の“可”であり、程度副詞の“可”とは連用できないと述べ、熊慧慧2020も確認の語気の場合のみ“真”と連用されると述べている。従って、程度副詞の“可”と語気副詞の“可”の違いは、以下のようにまとめることができる。

	強勢の有無	程度副詞“真”との連用
程度副詞の“可”	有	不可
語気副詞の“可”	無	可

表 3. 程度副詞“可”と語気副詞“可”の違い

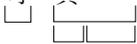
このうち、強勢の有無については音声の特徴であるため、今回の調査では測ることができない。一方、程度副詞“真”の連用については、今回の調査例文には、5個あり³⁾、いずれも語気副詞として解釈されると調査当初は予想していた。一方、程度副詞は形容詞や心理動詞を修飾するのが普通であるので、“可”がそういった述語を修飾する場合、程度が高いことを表す可能性が高いと考え、“可”が形容詞及び形容詞を含む述語（以下、形容詞性述語と呼ぶ）を直接修飾するものを調査例文に5個含めた。この10個の“可”について、どの語気として判断されたかを以下に示す。

	程度が高いことを表す	左記以外	合計
“可”+“真”	2	3	5
“可”+形容詞性述語	4	1	5

表 4. “可”の後続要素と母国語話者の語気選択の関係

表 4 中段に示したように、「可”+“真”」の組み合わせでは、程度が高いことを表すと判断されたものが2個、それ以外が3個であるから、程度副詞の“可”と語気副詞の“可”の区別は、“真”があるかどうかに影響を受けないということが分かる。

「可」＋「真」＋述語」の組み合わせは、IC分析により構成要素を飛び越えた修飾関係が存在しないとみなすならば、構造的には(22)のように表される。

22) 可 真 ……


(22)の図の示すように、「可」は「真」を含めた述語全体を修飾し、「真」はその直後の述語のみ修飾する。「可」の方が「真」よりも作用域が広く、そのため、命題全体への態度を表す語気副詞の解釈が得られやすい。だが、「可」が「真＋述語」全体の表す述語の程度が高いことを表す、つまり「その述語の特性を持つ程度」が高いことを表すなら、程度副詞の解釈が可能になると思われる。あるいは、この二つの副詞の連用が多くあるために、「可真」が程度の副詞として再解釈されている可能性も考えられる。いずれの説が適切であるかは、さらなる考察が必要だと思われる。

一方、表4下段の示すように、「可」＋形容詞性述語」は4個までが程度の高いことを表すと判断され、それ以外の語気に判断されたのは1個のみであった。例文の選定において、特別な語気を含意しない文脈と、対比の対象がある文脈をあらかじめ含めていたが、対比の対象がある文脈では、「可」の修飾対象が形容詞性述語であっても、程度副詞としては認識されないことが検証された。

母語話者は、「可」の後に別の程度副詞が現れても、「可」を語気副詞に判断するとは限らず、「可」の後に形容詞性述語が現れても、程度副詞として判断するとは限らない。そこで、どの語気を持つかの判断に影響を与えるのは、前後の文脈であると思われる。

5. まとめ

本稿では、呂叔湘1980で強調の語気を表すとされた副詞「可」について、その語気についての先行研究をまとめ、8種類の語気にまとめた。その語気を含むような例文を選定し、母国語話者3人に語気の判定を依頼し、26個の「可」

については、かなり高い一致度の判定が得られた。さらに、“可”を程度副詞として判断する基準は、修飾対象の違いではないことが分かった。“可”と“真”が連用できないという基準、“可”の後に形容詞性述語が続くという基準のどちらも“可”が程度副詞であると判断するには十分ではなく、前後の文脈が判断に大きな影響を持つ。語気副詞の“可”と程度副詞の“可”は、もともと異なる起源を持つが、両者を明確に区別する環境は、現在の中国語では特定できないことが分かる。今後、強勢のあることが程度副詞“可”の判断基準であるかどうかという点も検証していく予定である。

注

- 1) 語気の判断、例文の妥当性の確認については、お茶の水女子大学非常勤講師の王芸嬭先生に協力していただいた。
- 2) すべての例文の公開は、研究終了後に行う予定である。
- 3) 例文には、“真的”を含む。

〈参考文献〉

- 陈朝珠 2001 〈浅谈副词“可”、“真”的用法〉《广西大学学报（哲学社会科学版）》第23卷、2001年6月、178-179。
- 陈佳佳 2015 “可”强调功能的产生及演变《绵阳师范学院学报》第34卷第7期17-24。
- 高松 2009 〈话题焦点敏感算子“可”和语气词“呢”的比较〉《哈尔滨学院学报》第30卷、2009年6月：127-132。
- 原由起子 1985 「語気副詞〈可〉と〈并〉〈倒〉〈却〉」『中国語学』第232号、44-57。
- 黄正德 1988 〈汉语正反问句的模組语法〉《中国语文》1988年第4期。
- 江蓝生 1990 〈疑问副词“可”探源〉《古汉语研究》1990（3）：44-50。
- 江蓝生 2001 〈疑问副词“颇、可、还”〉《近代汉语探源》北京：商务印书馆、65-94。
- 蒋协众、魏会平 2008 〈副词“可”的词类划分及其轻重读规则〉《殷都学刊》2008年、112-117。
- 李冬梅 2014 〈副词“可”的义项分析〉《大庆师范学院学报》第34卷第5期、p.81-84。

- 李善婧 2009 〈语气副词“可”的语义指向分析——兼论“可”的语义指向分析〉《现代语言（语言应用研究）》2009.01、65-68。
- 刘丹青、唐正大 2001 〈话题敏感算子“可”的研究〉《世界汉语教学》2001年第3期（总57期）、25-33。
- 罗晓英、邵敬敏 2006 〈副词“可”的语义分化及其语用解释〉《语言学研究》总第121期、2006年第2期、102-109。
- 吕叔湘 1980 《现代汉语八百词》北京：商务印书馆。
- 齐春红 2006 〈现代汉语语气副词“可”的强调转折功能探源〉《语言研究》2006年5月代3卷第3期、138-144。
- 齐春红 2008 《现代汉语语气副词研究》85-207。
- 盛继艳 2005 〈现代汉语语气副词“可”的语用功能分析〉《广西社会科学》2005年第6期、158-161。
- 盛继艳 2006 〈语气副词“可”的语义分析〉《佳木斯大学社会科学版》第24卷第6期、42-45。
- 苏俊波、余乐 2018 〈语气副词“可”的核心语义〉《汉语学报》2018年第3期。
- 孙薇 2002 〈语气副词“可”的语用分析〉《语言研究》2002年特刊。
- 王素改 2015 〈语气词“可”的焦点标记功能〉《华北水利水电大学学报（社会科学版）》第31卷第6期、137-141。
- 王素改 2016 〈论语气副词“可”〉《湖南人文科技学院学报》第33卷第1期、91-95。
- 王英宪 2015 〈对比与强调——谈陈述句中的语气副词“可”〉《语言教学与研究》2015年第2期：83-91。
- 吴振国 1990 〈关于正反问句和“可”问句分合的一些理论方法问题〉《语言研究》1990年第2期、58-67。
- 熊慧慧 2020 〈语气副词“可”的语义差异及内在联系〉《江西电力职业技术学院学报》第33卷第9期：138-142。
- 徐杰、张媛媛 2011 〈汉语方言中“可VP”问句的性质〉《汉语学报》2011年第2期、60-70。
- 杨安珍 2017 〈简析现代汉语副词“可”〉《商丘职业技术学院学报》2017年第2期、62-65。

中国語の副詞“可”の語気

- 杨惠芬 1993 〈副詞“可”的语义及用法〉《世界汉语教学》1993年第3期（总25期）、173-178。
- 张旺熹、李慧敏2009 〈对话语境与副詞“可”的交互主观性〉《语言教学与研究》2009年第2期：1-7。
- 张秀松 2016 语气副詞“可”的语法意义的生成研究《江苏师范大学学报（哲学社会科学版）》第42卷第4期：125-134。
- 张雪平 2005 〈“可”的程度意义及其来源和演变〉《天中学刊》第20卷第6期、67-70。
- 张谊生主编 2000 《现代汉语虚词》上海：华东师范大学出版社。
- 朱德熙 1985 〈汉语方言里的两种反复问句〉《中国语文》1985年第1期。

*本研究は、JSPS科研費JP20K00601の助成を受けたものです。